

---

# 本当にあった飛び降り事件

(、´俺`)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本当にあつた飛び降り事件

### 【Nコード】

N4195D

### 【作者名】

( 〃 俺 )

### 【あらすじ】

小学生時代にあつた、嘘のようで残念ながら本当にあつた事件のお話

## （前書き）

勢いでやってしまった、今は反省している。でも後悔もしている。

小学生にとっての友達の価値観なんて物は、一緒に遊んでいて楽しいか楽しくないかのどちらかで決まる。

誰だっけ一緒に遊んでいて楽しかったらまたその人と一緒に遊びたいと思うだろうし、

逆に楽しくなかったら次はその人と一緒に遊びたくないと思うのが普通だ。

ちなみに僕はその内の“楽しくない”と思われる分類の子供だったらしい。

まあ少し理由を話そう。

当時の僕は生れ付き足が弱かったのもあり、鬼ごっこやサッカーが苦手だった。

それにドッジボールやキャッチボールもボールがとれないうえに的

が大きい……要は太っていたので当てられ易くて嫌いだった。

………と言いか運動系の遊びは殆んどが大嫌いだった。

うん、だって疲れるし。

それに僕は性格にも問題があったんだ。

僕は太っていた………と言っても今も太っているけどね。

まあそんなデブがクラスの中に一人でも居たら子供たちはどうするかな？

そりゃもちろん馬鹿にするよね。デブだの豚だの色々言ってね。

でも所詮は子供の言う言葉、笑って誤魔化せばいい。

だけどよく考えてほしい。当時の僕もまだ“子供”だ。

僕はその“デブ”だの“豚”だの言われるのが大っ嫌いだったらしく、何故かムキになって言い返してたらしい。

そしてそれを面白がってまた馬鹿にしてくる奴らが居るもんだから僕は……

泣きながら暴れて、

周りに物を投げて、

誰かを怪我させて、

先生に怒られて、

さらに家に帰って親に怒られる。

何てことをよく繰り返していた。

今思うと小学校の頃の先生は火の元の生徒より爆発元の僕ばかり  
起こってたな……

まあそんなことは置いといてさ。

こんな迷惑な糞肉餓鬼なんかと遊びたいと思う物好きなんか居るわ  
けないよね（笑）

そんなこんなで小学生の僕には友達と呼べる友達が殆んど居なかつ  
たってことさ。

つと、ここで話を題名通りの本題に入れるが、その事件は僕が小学四年生の時に起きた。

と言っか起こした。

僕にとっての四年生の時と言っのはあまり良いことがない頃であつてね。

何故ならその年の同じクラスには僕の苦手なタイプの人間が多かつたからなんだ。

まあ今までの学年（一年、二年、三年）の時も居たっちゃ居たけど

……



四年生の時はさらに、数少ない友達も特に少なかったんだよね。

あ、因みに僕の苦手なタイプの人間って言うのはね。

人の事をバカにして笑いを取るのが大好きで相手の気持ちを気にしないような奴や、

ルールを破るのがカッコいいなんて思っているような奴、

とかのこと。

まあ今ならそんな奴らの事も笑って誤魔化すことが出来るけど、

何せ当時の僕は馬鹿正直な餓鬼だ。

笑いのネタにされればマジギレしてたし、

ルールを破っている奴を見たらわざわざ先生にチクったり、

授業中に五月蠅かったら勝手に注意なんかしちゃってたんだよね。

他の奴らからしたら僕の方がウザイって言うの（爆）

話がずれてしまったので元の話に戻そう。

とりあえず苦手なタイプの人間が多かったその時は毎日ストレスを溜めがちだった。

さらに家に帰ってもその頃は特に両親の喧嘩が激しい時期で家でもストレスが溜まりっぱなし。

今考えるとあの時は結構な鬱状態だったかもしれないや……

そんな状態で事件の日は来た。

その日もいつもの様に朝に学校に登校したが、先生の用事で朝の会（高校で言うショートホームルームの時間）が自習の時間になった。

しかし、周りの奴らは所詮小学生なんだから自習の時間なんか静かに過ごすわけがない。

だけど僕はそれがとても気に入らなくて少し大きな声で。

「静かにしろよ！」と言った。

でも周りの奴らが静かになる雰囲気はない。

もう少し大きな声で

「だから静かにしろよ！！」と言う。

聞こえた奴が何人が居たみたいだが、「またか……」といった顔を  
して無視をする。

そこでキレた僕は完全に公害レベルの声で。

「静かにしろって言ってるやろが  
ああああ！！！！」

と言った。

いい忘れてたけど、実は僕関西人ね

まあそんな鼓膜が潰れるような声出されちゃ他の皆も黙っちゃいいい。

クラス全員で

「お前の方がうっさいんじゃないボケだの

「もっと小さい声で言えやデブ」  
だの

「豚は静かに勉強してろ」

だの集中砲火ですよ。

二回目の言葉は毎回言われるけど俺が最初小さめの声で注意してたの知らないのかな……

つとまた話が脱線したが問題はその後。

何故か知らないがクラスの皆の言葉がいつもより酷くなっていった。

「つーかお前ホントウザいんやけど、死んでくれん？」

「ホントや、死ね死ね」

『しーね、しーね、しーね』

なんか死ね死ねコールが出来上がった。

自習の時間で先生も居ないのでそのコールはずっと続く。

男も女も関係なくみんなで仲良く死ね死ねコール。

そしてそれを受けるのは僕。

子供って言うのは簡単に死ねと言うから困る。

まあ本心じゃないんだろうけど。

でも当時の僕は本当に悲しかったね……

だって死ねだよ？ しかもクラス全員で？

その時の僕は学校に居ても楽しくないは家に帰っても家族はギクシヤクしている状態。

しかも家でも家族の内扱いが悪い方だった。

まあその頃三兄妹だったんだけど、

長男である兄貴は初めての子供。

長女である妹は初めての女の子。

そして次男である僕は二番目の男の子、二番煎じであるわけだ。

親も意識はしてなかったかもしれないが、やっぱり僕にだけは態度が冷たかったと思う。

だからその時僕の頭の中には “生まれてこない方が良かった” 何て考えが入っていた時期だった。

そんな時に皆に “死ね” 何て言われるんだよ？

「じゃあ本当に死んでやろうっ」って気分になっちゃった、テヘッ

教室を飛び出した僕は同じ階にある渡り廊下に出た。

僕の学校の渡り廊下からは屋上に繋がっててね、そこから僕は屋上に移り飛び降りる準備をした。

でも、まだすぐには飛び降りない。

何故なら、その時の僕の頭には完全に“死んで他の奴らに言葉の重さって言うのを思い知らせてやろう”といったことでいっぱいだった。

だから皆が追い付くのを少し待った。

案の定渡りししばらくしたら廊下には野次馬がいっぱい来ていた。

クラスの奴らから隣のクラスの奴ら。そして他学年の人たちまで来ていた。



ステージは完全に出来ていた。

そして僕はそれを確認して飛び降りた

ら良かったのにね。

.....

.....

.....

そうさ、僕は飛び降りなかったんだ。

でも、別に怖かった訳じゃないよ。

ただあることが原因で飛べなかつたんだ。

まあそれも込みでその当時の僕に視点を移してこの話を終わらせたいと思う。

と言うことで過去の僕、  
後は任せたＺＥ

うわ、ちょ、キモッ！

なんか今キモいメッセージみたいなのがボクの頭に來ただけど！

まいつか、そんなことより早く死んで樂になろう。

ああー、思えば楽しくない人生だったなー。

って言ってもまだ10年しか生きてないけど。

ようち園の頃からイジメられるわ家でお父さんとお母さんは“りこん”する“りこん”するさわいでるし。

何もいいことがなかった気がするなー。

ああー、でもゲームしてるときは楽しかったな。

後マンガ読んだるときも。

そう言えばあのマンガまだ終わってないから続き読めないや。

ああー、読みたかったな。

いや！　ボクは死ぬんだ！　そんなこと忘れるんだ！！

あつ、やっとみんな来たや。

はははっ、アイツホントにこんな事するなんて思ってなかったから  
おどろいてやがる。

じゃあ後は飛び降りるだけだな。

ああー、お父さん、お母さん、そしてクラスの奴ら。

うらむなら自分をうらんでね。

じゃあさようなら。

つ  
！ て  
！ ま  
！ て  
！ え  
え  
え  
え  
え  
え  
え  
い  
い  
い  
つ  
！  
！

こ　こ　二　階　じ　ゃ　ん

うわあ……よくよく考えたら二階から飛びおりてもそんなかんたんに死ねないじゃん……ただ痛いだけじゃん……

ああー、四階に行こうにも人いっぱいいるしもどれねえ……

ん？

「おいおいwwアイツがやつと死んでくれるらしいぜww」

「うはwwマジでwwwヒヤッホーイwwww」

『しーねwwwしーねwwwしーねwww死んじゃえーwwww』

ええええええええええ！！？

普通こついつじょうきょうの時は止めない！？

っーかおい！ 他学年の奴まで一緒になっていつてるじゃん！？

何だよ！？ ボクあんたの顔知らないよ！？



なんかここで死んだら逆によろこばれるような気がしてきたや……  
これじゃ後かいさせてやるうつていつ計画が台無しじゃん……

もういいや……………死ぬの止めよ……

そして僕はこの後クラスの皆から

「怖いから死ねんかったんやろ」

だの

「死んでほしかったな」

だの言われ、余計に色々言われるようになり。今でもネタにされるようになりましたとさ。

~~~~~  
( 終わり ) ~~~~~

（後書き）

あれから数年間、一応自殺未遂もなく僕はなんとか生きています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4195d/>

---

本当にあった飛び降り事件

2010年10月15日23時16分発行